

自分バージョンアップと出会い

立野 裕子

順天堂大学医学部附属順天堂医院産科病棟

自分バージョンアップ

現在、わが国では数年前には聞いたこともなかった概念、さまざまなキーワードを耳にするようになった。地方の時代とワールドワイド。グローバルスタンダードと顧客価値。全体満足から個人満足。環境共生と生命の本質。インターネットとバーチャルリアリティ。安穩としていては取り残されてしまう情報の氾濫状態にある。

そんな中、個性尊重でお産の世界も激変したが、助産婦のポジションは変わったのだろうか？

いつの時代も自分軸を固め一筋に生きる助産婦は、魅力がある。決して「専門バカで世間知らず」ではない。助産婦として真摯に活動し、みんなのこころ・からだ・社会に優しいケアに励む。生命をじっと見つめ、常に地球の環境バランスを尊重する。人に優しく、セルフポジションが確立した助産婦は、輝いて見える。

このめまぐるしく動く世の中ではあるが、私もそんな助産婦になりたいと思った。そしてまた、個人で勝負できる自分になりたくて、私は自分バージョンアップを目指してきた。臨床を離れがたく助産婦を続けながら、多方面のことを学んだ。学ぶことは幸福の味わいといえる。そんな私を見守り続けてくれた方々への感謝を込めて、今まで出会った世界を紹介したいと思う。

病院の外で学ぼう

助産婦1年目。慣れない仕事に追われ、余裕がない日々。覚えることは膨大で、休日は眠って終

わり、同期と飲んでも仕事の話。毎日どっぴりと病院に浸り、自分が忙殺される焦り。

その職場に、大学に通う先輩たちがいた。仕事で発揮される助産婦の専門性と、看護だけに留まらない探求心に触発され、「私も病院の外に出て何かを学びたい」という思いが生まれた。

助産婦2年目。理解ある上司や先輩、同僚に恵まれ、法政大学経済学部に入學して通学生活が始まった。マクロ経済やバブル崩壊など、病院の中では実感できない世界を学んだ。念願の教員免許も取得した。すると、仕事も充実し臨床の喜びが分かるようになってきた。

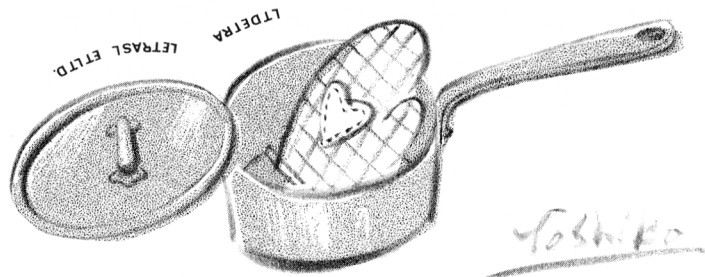
さらに助産婦経験5年で、厚生省看護研修研究センター助産婦養成所教員養成課程へ進んだ。

「助産婦って何だ?」「どういう助産婦が望まれているのか?」セルフポジション確立を目指して始めた、模索期。センターの高橋弘子先生をはじめ、真面目に助産婦の職能と教育に取り組む同級生、自分軸の確立した開業助産婦さんにお会いする機会も増え、毎日が自己啓発の1年だった。

助産婦7年目。多摩大学大学院修士課程経営情報学研究科に進学した。病院経営者が納得する、現場の重要性を研究したかった。

理論研究出身の教授とビジネス界出身の教授が半々の、新しい大学院である。現役の社長や、経営コンサルティングに、直接指導を受けられて刺激的だ。しかし入学当時、その教授陣の名を一人も知らなかった。周産期以外の世界を知らない、世間知らずを実感した。

この大学院の特徴は、修士論文の指導教授が3



人以上と規定されていること。ちなみに私の指導教授は、サービスマネジメントの近藤隆雄教授、ソシオビジネスと経営戦略の北矢行男教授、先進的エコノミストでソフト化経済センター所長の日下公人教授だ。病院の中には決して出会うことのできない教授陣に、素晴らしいご指導をいただいた。知的満足を覚える贅沢な時間をもつことができた。

社会人大学院は、第一線にいるビジネスマンや会社の経営者が同級生である。授業やゼミ、課外で、オフレコの裏話が聞けるおもしろさ。ビジネス界は私にとって、何もかもが新鮮だった。

授業やゼミは、ベンチャービジネス、企業戦略、デリバティブなど、病院では無縁のはじめての世界。マネージド・フューチャーズの授業中、“実践してこそ学んだ意義がある”とゼミ仲間と海外投資信託で盛り上がり、今なら笑い話の投機も実践した。株価の背景となる経済政治的背景の「読み」も楽しい。経営の視点で医療の問題や保険制度の議論をし、経営視点や助産婦観が養われていった。

助産婦サービス

ゼミで出た話である。新幹線のグリーン車で、乗務員は「サービスです」とおしぼりと飲み物を出し、外国人が「ではいらない」と断っていた、と。日本で「サービス」は無償の意味。欧米ではサービスには代価は当然、有償である。

病院もサービス業。なのに学生の頃から病院の中にいても、保険点数にも無関心、患者がいくら

支払っているか知らずとも良く、「お金のことを言うのは汚い」という雰囲気があった。「看護がサービス業というのに抵抗がある」という意見も聞いたことがある。

サービスは無償ではない。助産婦はサービス業。なりわいと言うからには、職能の価値に見合った価格に責任を持つ立場にいる。保健・医療サービスの専門職として、サービス価値が品質・価格・コストに見合っているか検討する必要を感じ始めた。

「真実の瞬間」を大切に

上司や職場の理解により、「学生」ができる環境を整えてもらい、今年で夜勤専従4年目。今年から鍼灸按摩など東洋医学の勉強を始めた。自分バージョンアップは、自分だけではできない。協力してくれた皆様に、いつか還元をと心に誓う。

R・ノーマンの『真実の瞬間』は、サービスの現場の重要性を示している。サービスは生産と消費の同時性を持ち、顧客と従業員が向き合う瞬間、サービス品質の評価をする。同様に助産婦は、患者の満足度向上に影響しロイヤリティを高め合う。直接看護が大切な「真実の瞬間」。

深夜の電話、外線コール。「さあお産だ」。今日も出会いを大切に、患者と向き合う「真実の瞬間」を忘れずに頑張ろう。

今回は、諏訪赤十字病院産婦人科病棟係長として、臨床看護と学生指導に励む、小林朝子さんにバトンを渡します。よろしくお願いします。

(立野裕子さんのメールアドレス YRX02107@nifty.ne.jp)